

## スウィフトの生涯 (IX)

「アイルランド製品全面利用への  
提案」執筆からウッド事件の終結まで  
(1720 — 1725)

### 三 浦 謙

アイルランドで準植民地的な生活を5年経験したスウィフトは再び政治パンフレットに手を染めるようになる。1720年ダブリンで公刊された「アイルランド製品全面利用への提案」<sup>(1)</sup>がそれである。

アイルランドでの輸入品禁制の提案は必ずしも新しいものではなかった。18世紀の最初の10年間にアイルランド下院は少なくとも3度アイルランドの国内産業振興のため衣料と家具はアイルランド製品をもっぱら使用すべきだという決議をした。だが、いずれもイングランドに阻まれ実効はなかった。

スウィフトの提案の目的はイングランド製品の輸入禁制を訴えるだけに留まらなかった。イングランドによるアイルランド搾取の現実を発くことにあった。

スウィフトは「オウィディウス」にでてくるアラクネー<sup>(2)</sup>とパラス<sup>(3)</sup>の譬えばなしをあげる。女神パラスは機織の名手である乙女アラクネーを嫉妬のあまり蜘蛛に<sup>へんげ</sup>変化させて、じぶんの内臓から糸を紡ぎだすように命じた。この女神パラスの苛酷な罰は許し難いが、イングランドはアイルランドにたいしてパラス以上の手ひどい仕打を加えている。イングランドはわれわれの内臓をあらかた抜き取り、じぶんの腹から糸を紡ぎだすこともできなくさせているとスウィフトはいう。

事実、アイルランドの窮状は目を蔽うばかりであった。ニコルソン主

教<sup>(4)</sup>はデリー<sup>(5)</sup>へ赴く途上で目にした農民の惨状を次のように伝えている。「彼らは悪臭を放つ芝土でできた小屋に住んでいて、裸の上に着ているのはボロボロの毛布のみである。地代を払うために山の頂きまで耕作を強いられ、女房と10人ないし12人の裸足の子供を養うのに1畝か2畝の馬鈴薯があるだけである」<sup>(6)</sup>

3年後の南海泡沫事件<sup>(7)</sup>の後は事態はさらに悪化する。とくにアルスター<sup>(8)</sup>が酷かった。ニコルソンの家の前で駅馬車の馬が殺されたことがあった。ニコルソンの下僕が制止しようとする、4、50人の集っていた作男たちが斧と肉切り包丁で脅した。彼らは直ちに殺した馬の皮を剥ぎ、肉を切り裂き、それぞれの取り分を持って散っていった。

地主——多くはロンドンに居宅をもつ不在地主——は容赦なく農民を苦境に追い込んだ。地主は仲介人に細分化させた土地を貧農に貸し与え、地代を払えない農民は即座に追放した。空いた耕地は遥かに維持が楽な牧草地に切り換えられた。逆に、小作農が必死にもとめても牧草地を耕地に転換することは許されなかった。したがって、ジョージ1世の頃にはアイルランドは穀物の大半をイングランドから輸入したのである。

「地主階級はアイルランドの農民をフランスの小作農やドイツのおよびポーランドの農奴よりも惨めにしている…この国を旅して自然のたたずまいや住民の顔つき、服装、住居などを目のあたりにする者はだれしも法律や宗教や人道が励行されているところだとはまず思わないだろう」<sup>(9)</sup> とウィフトはいつている。

機織職人も深刻だった。元来、アイルランドの土壌と気候は牧畜に向いていたので、平均してアイルランドの羊のほうがイングランドの羊よりも良質だった。したがって、羊毛業者と機織職人が協同すれば優良な毛織物の生産は可能だった。ところが、毛織物業が1国の繁栄の中軸であると考えていたイングランドはイングランドからの輸入製品をアイルランド国内で着用させた上、18世紀以降はアイルランドが毛織物製品をいかなる国にも輸出することを禁じた。加工していない羊毛をイングランドに輸出することだけがアイルランドに許された。製品輸出は禁制され、国内市場は輸

入品に圧迫されたので夥しい数の機織職人が解雇された。聖パトリック大聖堂は機織職人の居住地の中心にあったので、スウィフトは毎日彼らの苦境を目にしていた。とくに、南海泡沫事件の後は酷かった。スウィフトは窮乏している機織業者を救うために進んで彼らに金銭を融通した。ダブリンの機織職人組合は後年スウィフトへの感謝の手紙を公けにするばかりか、代表が牧師館にスウィフトを訪ねて織物の値段や職人の賃金を決めるのにスウィフトの意見をもとめている。

ところで、「アイルランド製品全面利用への提案」はエグザミネー紙に寄稿していたようなこれまでの論考とは異なり政党色がない。ないどころか特定の党への忠誠を拒否していて政治的であると同時に道義的であるのがその特色である。

「提案」はジョージ1世の60回目の誕生日の前日である5月28日に公刊された。「ホイッグの公共精神」以来6年ぶりである。公刊後、6年前の政治パンフレットと同じような災難に出くわした。印刷業者のウォーターズが煽動的なパンフレットを公けにしたという理由で迫害された。スウィフトの旧敵であるミドルトン卿ブロドリック<sup>(10)</sup>は二国間の離反を企てているかどでスウィフトを有罪にするため首席裁判官のホイットシェッド<sup>(11)</sup>に働きかけた。起訴陪審が無罪の評決をすると、ホイットシェッドはその決定を再考するよう9回も評決のやり直しをさせた。陪審員たちは疲れはて裁判のやり直しを意味する特別評決をした。ホイットシェッドは「提案」の執筆者の意図は僭王ジェームズ・F・E・スチュアートを招くことにあるとまでいった。だが、やり直し裁判が始まるまえにスウィフトはアイルランド総督グラフトン<sup>(12)</sup>に働きかけて裁判の再開を不可能にさせた。

「提案」の末尾で国立銀行への言及がある。スウィフトはダブリンに国立銀行を設立する計画に反対している。スウィフトの頭の中では国立銀行は投機家と結びついていた。南海会社の株が1720年1月の1.5倍から8月の10倍に急騰したのは彼らの操作によるものとスウィフトは考えた。9月になると南海会社の株は額面の1.5倍まで急落した。10月15日付のヴェネッサへの手紙で「南海会社と国の破滅と金の不足が話題をさらっていま

す」<sup>(13)</sup>とスウィフトはいつている。

国王自身は国立銀行設立に賛成だったが、1721年アイルランド議会は銀行設立案を否決した。

後年のことになるが、1783年ようやく国立銀行がダブリンに設立された時、プロテスタントの加入者の大半は地主階級の資産家だった。

「提案」の印刷に当って獄に下ったウォーターズは真面目な本を活字にする良心的な業者ではなかった。世相の動きをみて煽動的なパンフレットを出す抜目のない職人だった。だが、「提案」公刊のかどで有罪となったウォーターズをなんとか救わんがため、スウィフトはまず両党の実力者に働きかけた。スウィフトはまずホイッグの有力者だが「提案」賛成でイングランドでの公刊も一時は考慮していたモレスワース卿<sup>(14)</sup>を訪ねて助力を依頼した。ハノーヴァー王朝を支持するトーリーの頭目で新任のアイルランド総督グラフトン侯の義理の父親であるサー・トーマス・ハンマー<sup>(15)</sup>と、オーモンド侯の血縁であるアラン<sup>(16)</sup>侯には手紙で支援を懇請した。スウィフトは1年以上待った。とうとうグラフトンが折れて告訴は取り下げられウォーターズは無罪放免された。

この時期、スウィフトは聖職者になったばかりの若い牧師に苦言を呈する一文<sup>(17)</sup>を書いている。この中で、スウィフトはまず彼らに英語を勉強してほしいといつている。適語を適所に配置することが文章の要諦だが、彼らの措辞には曖昧な用語が頻繁に見うけられる。若い聖職者の説教から、100人の聴衆の中99人が理解できない用語を数百挙げることができるとスウィフトはいつている。スウィフトは曖昧ないいまわしを避けるためフォークランド卿<sup>(18)</sup>がとった方法を勧めている。フォークランドは執筆中ある用語がわかりやすいかどうか判定にくるしむときには、奥方の部屋つきの待女の判断にゆだねて採否をきめた。フォークランドのこの配慮は論文ばかりでなく説教にも必要だとスウィフトはいつ。

次は雄弁術である。雄弁術を磨くためにスウィフトはギリシャとローマの2人の雄弁家デモステネスとキケロを学ぶようにいつている。上層の有識者を対象にすることが多かったデモステネスは演説にあたって立論の力

強さに最も重点を置いた。キケロは無知だが誠実な大衆層を考慮して情感に訴えることを最も重視した。

ただアイルランドでの説教では後者のやり方は余り効果がない。この方法で聴衆がうけた感銘はせいぜい翌朝か次の食事の時間まで続けばよしとしなければならない。スウィフトは自身の経験からそう訓戒している。事実、スウィフトの説教は聴衆の気持ちを揺さぶるのではなく、理詰で相手を納得させるというやり方だった。

ここで、1721年1月10日付のポープへの長文の書簡に触れなければならない。この書簡でスウィフトは、さきに触れた「アイルランド製品全面利用への提案」の経緯を説明した後で、宗教的には保守だが政治的にはリベラルな自身の態度を鮮明にしている。たとえば、人間に本来具っている自由を基礎づけるため年次国会の開催は必要であるといい、たとえ一時的にしる、個人の自由にかかわる法律（人身保護令状）を中止するのは控えるべきだといった上で、スウィフトは次のようなことをいう。「法律はその必要にせまられれば廃止することはできるが、国民感情は変えることはできない。相続権は国民の最大関心事なので、大きな政治的変容があってそれが断たれた場合には国家の平安に最悪の影響があろう」<sup>(19)</sup> これはロック<sup>(20)</sup>の社会契約説に通ずる考え方である。ロックはホブズ<sup>(21)</sup>と違って人間の自然状態は自由平等であり、自然状態での労働で個人が獲得した私有財産を擁護するのが国家の役目であると考えていた。

こうして、スウィフトはこの時期からアイルランド国民一般を援護する立場を一段と明確にするようになる。その契機になったのがウッド事件<sup>(22)</sup>である。

当時、アイルランドでは4分の1ペニーと半ペニー用の銅が甚だしく不足していた。そのため庶民の日常の収支や賃金の支払いにたいへんな不都合が生じた。やむなく私鑄貨幣が賃金の支払いに当てられ、いわゆるラップ貨<sup>(23)</sup>が流通した。この機に乗じてウイリアム・ウッドなる鉄商人がアイルランドで流通させる銅貨を鑄造して一儲けしようと企んだ。貨幣を鑄造して発行する権限は国王にあったが、銅貨にかんしては偽造貨幣にかかわ

る厳しい罰則も施行されない仕末で、銅貨は 18 世紀を通じて正当な通貨とは考えられていなかった。アイルランドばかりでなくイングランドでも銅貨の鑄造は個人の利殖の対象になっていたのである。

ウィリアム・ウッドは 1722 年 7 月 12 日ジョージ 1 世の愛妾ケンダル侯夫人を通じて銅貨鑄造の特許を獲得した。鑄造額は 108,000 ポンドで、ケンダル侯夫人はウッドから 10,000 ポンドの謝礼を受けとった。

ウッドはブリストルで鑄造を行い彼自身会計検査官の役を兼たので、銅貨と引き換えに正金を提出する必要もなかった。特許の有効期間は 14 年だったが、罰則の規定がないので、ウッドの望む通りの期間延長も可能だった。

キング大主教は新聞で特許のことを知り、7 月 10 日、時のアイルランド総督グラフトンに手紙を書いている。

私は 100,000 ポンドが鑄造されるときいておりますが…結果的にはその倍額が鑄造されることになりましょう。そして少くともその半分がウッドの利益になり、その分の金と銀がアイルランドの国外に流出します…やがてアイルランドでは真鍮しか流通しなくなるでしょう。<sup>(24)</sup>

キング大主教のようにアイルランドの財務官もグラフトンに再考を促したが効果はなかった。グラフトンはサンダーランド<sup>(25)</sup>の死後、宰相の地位についたウォルポールの走狗で、事前にウォルポールから知らされていなかったにも拘らず、すでに許可済みの特許の推進役だった。グラフトンという男はチャールズ 2 世の庶子の子息で、趣味は女色と狩猟。スウィフトによると「なに一つ長所のない無能な感傷家」<sup>(26)</sup> だった。

アイルランド議会は許可後 1 年以上経過してから、民衆感情に煽られて委員会を発足させ特許問題の調査に乗り出した。委員会はグラフトンに特許の写しと関係書類の提出をもとめた。グラフトンは最初虚言を弄して申し出を断ったが、後、にわかにな態度を更め、関係書類を議会に提出した。

特許の規定では 1 ポンドの重量の銅貨を 30 ペンスとすることになっていた。これはイングランドの同じ重量の銅貨を 23 ペンスとするのにたい

して遥かに割安だった。そればかりか銅貨の材質分析を行った結果、銅の含有量は特許の規定を下廻ることもわかった。

アイルランド議会は2週間で上奏文をまとめグラフトンとウォールポールの頭越しに国王に提出した。議会はそこでウッドの非道を訴えウッド貨の中止を請願した。国王の回答は特許の受益者が特許を不当に濫用したさいには罰するが、特許そのものは先例に倣って認可されたので不当ではないという内容だった。国王は末だウッドに加担していたのである。

上奏文の1件を知ったウッドは1723年10月5日のイーブニング・ポスト<sup>(27)</sup>と同年10月8日のフライイング・ポスト<sup>(28)</sup>で、ウッド貨は特許の条項に違反していない正当な通貨であり、ウッド自身不当な利益を貪ってはいないといって反駁した。そして、ウッド貨に反対する者を、自分の思い通りに調理されていないからといって健全な肉を口にしないで餓死する人間に譬え、ウッド貨がアイルランドで受け入れられなければ、流通するように圧力をかけるといって脅した。

ウッドの傲慢な回答は国民の憤激を一段と強めた。この時、M・B・ドレイピア<sup>(29)</sup>という架空の人物を仕立ててアイルランド国民に向けられたスウィフトの第1書簡<sup>(30)</sup>が公けにされたのである。1724年2月のことであった。スウィフトは書簡のタイトル・ページで、「どの家庭もこの手紙を保管しておくのが妥当である」といい、ハーディング<sup>(31)</sup>という印刷屋には発行部数を増やすため、できるだけ安い値で売るように命じた。結局、粗悪な紙と活字で1部2ペンスで売られた。スウィフトは第1書簡で事実をありのままに伝えようといっって次のようなことをいう。

ウッド貨は悪質な貨幣で実際には $\frac{1}{2}$ ぐらいの値打しかない。だから、たとえば帽子屋が1つ5シリングで12ケの帽子を売ってもウッド貨で支払いを受けたら、5シリング受けとったことにしかない。国王は瞞されているので実状を知ったら直ちに特許を取り消すことだろう。ウッドは特許取得後大量の半ペニー貨を鑄造してコーク<sup>(32)</sup>、ウォーターフォード<sup>(33)</sup>その他のアイルランドの港湾都市に送りつけている。この特許がウッドの望み通りに効果を発揮すればアイルランドは破滅しかねない。いったん流通

したら数年で流通量は少なくとも5倍になる。これは今日アイルランドで流通している貨幣総額40万ポンドを上廻る。

こうって次のように締めくくる。昔、黄銅の雄牛の像の中に罪人を入れて火焙りにする残虐な刑をさる国王に進言した刑吏がいた。国王からおまえがまず試しに入ってみろといわれ、結局その男が真先に焼き殺されてしまった。ウッドはこの男と同じように悪業の果てあわれな末路を辿ることになるのだと。

この第1書簡発刊後ウッドへの非難は日ましに高まっていった。アイルランド総督としてウッド問題になに一つ収拾策が講じられないグラフトンの無能ぶりに業を煮やしたウオールポールはグラフトンを更迭してアイルランド総督にカータレット<sup>(34)</sup>を任命した。スウィフトはカータレットとは親しく10年来の知己だった。1724年4月カータレットの就任が決まると、スウィフトは直ちにカータレットに手紙を書いて実情を伝えた。カータレットは即答せず、しばらく事態を静観した。

1724年7月イングランドの枢密院は同年4月に行われたウッド貨の公式の分析結果を知らされた。良質の銅貨であるということだった。ウッドの細工である。

ウッドはこの時期、鑄造量についても新たな提案をしている。頭初の100,800ポンドを40,000ポンドに減らし、銅貨と引替に金銀ではなくアイルランドの製品を受け取るという案である。ハーディングは新聞に掲載されたこの記事を自分のところで出している週刊のニュース・レターに転載した上、上記の点の回答としてドレイピアの第2書簡が近々出ることを明らかにした。

第2書簡は「ハーディング氏への書簡」<sup>(35)</sup>というタイトルで1724年8月6日刊行された。第2書簡で、スウィフトは早速同年4月27日のウッド貨の分析結果に触れている。検査の結果、半ペニー60ケが14オンス（トロイ衡）<sup>(36)</sup> 4分の1ペニー30ケが3 $\frac{3}{4}$ オンス（トロイ衡）で特許の規定量を上廻っていること。それに、共に赤熱してもハンマーで薄く延ばしても亀裂が入らないということで、いずれも良質の銅貨と判定しているが、今回

分析の対象になったウッド貨は1723年3月から翌年の3月にかけて一部検査用に作られた銅貨で、これらはアイルランドに持ち込まれることはなかった。ウッドの意図は明白でウッドという男は、建築用の良質の煉瓦を1枚ポケットに入れて持ち歩き、人に見せては自分の家を売却する話を始める男と同じだとスウィフトはいう。

それに緊急事態にならないかぎり当座は40,000ポンド以上は鑄造しないとウッドはいいだした。だが、40,000ポンドはアイルランドが必要とする額のほぼ倍に当るし、だれが緊急事態を判断するのか。

金銀の代りにアイルランドの生産物を受け取ってもよいという提案も受け入れかねる。零に等しい通貨と引替になぜアイルランドの良質の羊毛を渡さなければならないのか。

支払いをうけるさいに1回当り半ペニー貨は5ペンス以上受け取る義務はないといっているが、これも要注意である。たとえば、支払いが20回になれば半ペンス貨の総額は9シリング2ペンスにもなるし、年間にすれば莫大な額になる。スウィフトは100ポンドの金を受け取るさいにウッドの4分の1ペニー貨が1枚でもあれば、追剥や強盗なみにウッドとその代理人の頭を射ち抜くといっている。獅子に屈するのは不名誉なことではないが、仮りにも人間の姿をした者が生きたままネズミに食い荒されるのには耐えられないからだと言っている。

そして、スウィフトは歴史上れっきとした王権の及ぶ国土で、強大な侵略者のためでもなく、疫病や飢饉のためでもなく、腐敗した政治のためでもない。たった1人の狡猾な商人のために1年以上にわたって毎日壊滅の危機にさらされている例はないと歎いて、アイルランド国民を「あなた方の心臓は蠟で塗りかためられているのか。耳は聴えず目は塞がれているのか」と叱咤している。

第2書簡発刊後間もない8月15日には、ダブリンの銀行関係者が糾合してウッド貨は決して受け入れないという宣言書に署名した。これまで伝統的に反目し合ってきたダブリンの機織業者と肉屋も公然と手を結んでウッド貨に反対した。ダブリンの国教会のさる教会委員はハーディングの

ニュース・レターに投稿して、慈善箱にウッド貨を投げ入れた者がいるが、どの教区民もウッド貨は決して受け取らないように嚴重に戒告した。

その後間もなく、1724年7月24日付のウッドの半ペニー貨にかんするイングランド枢密院の報告書がダブリンに届いた。ドレイピアの第3書簡<sup>(37)</sup>はこの枢密院の報告書にたいする回答として同年8月25日に発刊された。

第3書簡は長さにして第2書簡の倍はあるが、スウィフトは1週間で書き上げた。早々と仕上げただけに反復が多く、論理に一貫性を欠く憾みはある。第3書簡ではまず報告書がとりあげているウッド貨の分析結果に更めて触れている。報告書は純度、重量の点で特許の規定を超えていると知っているが、専門家の調査によるとウッド貨には4種類あり、その中の3種類は規定値を遥かに下廻っているという。

報告書はまた、ウッド貨の特許が事前にアイルランド総督やアイルランド議会の承認をえていない点にかんしては、これまでも銅貨鑄造の特許が関係者に事前通達せずに認可されている前例があるので違法ではないと知っているが、ウッドはすでに17,000ポンドの銅貨を鑄造し、さらにその6倍の銅貨を鑄造してアイルランドに持込もうとしているのだから、関係委員会はこの問題を更めて協議すべきであるといっている。

そして、アイルランドの両院が挙って悪質なウッド貨に反対して国王に上奏文まで出しているのにイングランドの枢密院にはこの点の認識がない。ウッドは私利を貧り、アイルランドを破滅させようとしていると警告して次のような言葉でアイルランド国民の奮起を促している。

アイルランドの国民はイングランドの国民と同じように生まれながら自由ではないのか。

アイルランドの国民はどうして自由を放棄してしまったのか。

アイルランドの議会はイングランドの議会と同じように国民の正当な代表ではないのか。

枢密院は公務の管理に当って国会と同等もしくはそれ以上に関与するの

か。

アイルランド国民はイングランド国民と同じ王を載っているのではないのか。

同じ日輪が耀いているのではないのか。

同じ神を守護神としているのではないのか。

私はイングランドでは自由の身であるが6時間で海峡（セント・ジョージ）を渡れば奴隷になるのか。<sup>(38)</sup>

こういつてから書簡の末尾で、スウィフトはウッドを旧約聖書のサミュエル前書に出てくるペリシテ人のゴリアテ<sup>(39)</sup>に譬える。身の丈6キュピト半の巨人ゴリアテは頭に黄銅の兜をかぶり、5,000 シェッケル<sup>(40)</sup>の黄銅からなる鎧を身にまとい、脚には黄銅の脛当、左右の肩の間には黄銅の矛を背負っていた。ウッドのように黄銅づくめのゴリアテは神に抗ったためイスラエルのダビデが投石器から放った礮石で額を割られて死ぬ。スウィフトはドレイピア（スウィフト自身）はゴリアテを倒したダビデだという。ダビデはゴリアテ退治にあたってサウルから戎衣の上に鱗綴の鎧を着せられるが、身動きができないので鎧も戎衣も脱ぎ捨て投石器と礮石だけでゴリアテに立ち向う。スウィフトは今手がけている反ウッド運動は自分がかならずしも適任とはいえないといいながらも、家に泥棒が這入りかけた時には、家の中で一番の弱虫が玄関のドアを押えに真先きに走りだしてゆく例もあるのだといって、あくまでもダビデの姿勢を貫く気概をみせている。

第3書簡公刊後、同年9月のハーディングのニュース・レターには、追討をかけるようにウッドを槍玉に挙げたバラッド<sup>(41)</sup>が載った。この中でウッドの末路を次のように占っている。

ウッドがどこかに落ちて死ぬ夢をみた。

そこでウッドは酒は飲まないことに決めた。

転んだのが命とりになるといけないのから。

夢は神託のように説明が難しいが

ウッドはキルメインハム<sup>(42)</sup>で絞首になることになった。(110—114)

「ウッドの死刑執行」<sup>(43)</sup>というさらに毒々しい戯文では、口々に罵る民衆の悪罵を70通り<sup>(44)</sup>挙げた後で、船材で作った等身大のウッドの<sup>ひとがた</sup>人形を肩に担いだ荷揚げ人夫を先頭に死刑場に向う行列の模様をつぶさに描いている。

これに対して同年の10月上旬には、ダブリン・インテリジェンス紙<sup>(45)</sup>にアイルランド国民がウッド貨を拒否すれば、ウッドは火の玉にしてでもアイルランドの民衆にウッド貨を嚙み下させようと企んでいるという記事が載った。

ちょうどこの頃、新任のアイルランド総督カータレットは妻と2人の娘を伴い豪華な馬車でアーリントン・ストリート<sup>(46)</sup>の邸を出た。10月12日のことである。カータレットの一行は2日後コヴェントリーで緋色のガウンをまとった市長と市参事会員の出迎えをうけ、ホーリィヘッドで乗船して10月22日木曜日正午ダブリンに着いた。ウッド排撃運動が頂点に達していた時で、カータレットがダブリンに着任する直前の10月21日にはドレイピア書簡中最も力強い第4書簡<sup>(47)</sup>が公けにされていた。カータレットはダブリン城内で号外売りが捌いていた第4書簡を着任した翌日すでに読んでいた。

第4書簡は次のように始まっている。

ウッドとウッドの半ペニー貨という不快な問題について私はこれまでに3通の書簡を認めましたが、人間の身体ばかりでなく政体の場合にも、弱っているさいには何度も強心剤をうたなければならないことがわかりました。長い間苦難に慣れっこになってしまった国民は徐々に自由の観念を失ってしまつて他人のなすがままになり、強者の手によって課せられたすべての賦課は法的な強制力をもつと考えます。ここから貧困と低俗な精神が生まれます。そして一個人ばかりでなく一国がその犠牲となるのです。

エサウ<sup>(48)</sup>が死を間近にして息を喘がせながら畠からやってきた時、一碗の粥が欲しさに生得権を売ってしまったのは不思議ではありません。<sup>(49)</sup>

次いで、スウィフトはアイルランドがウッド貨に反対するのはアイルランドがイングランドへの依存を振り払おうとしているためだというウッドの見解は歴史的にみても根拠がないという。土台、アイルランドはイングランドの従属国ではない。ヘンリー8世の治世33年目につくられた法令には「現国王およびその後継者がイングランド王国の一貫として本国土(アイルランド)を統治する君主となるべきものとす」と書いてある。スウィフトはイングランドとアイルランドの法令を隈なく調べたが、イングランドがアイルランドに従属するという法令がみつからなかったと同じように、アイルランドがイングランドに従属するという法令もみつからなかったという。この点はウッド事件の核心である。

したがって、階級、党派、宗派を問わずすべてのアイルランド国民は国を危くするウッド貨は、なんら恐るることなく飽くまでも排斥すべきなのである。ここで、スウィフトは「われわれはいわれのない恐怖に気分が滅入りやすいように、根拠のない希望に胸をふくらませがちなのだ」といって国民を戒め、被統治者の同意のない政治は奴隷制だとい切る。

最後に、ダブリン・インテリジェンス紙に掲載された「半ペニー貨を火の玉にしてアイルランド国民に嘸み下させる」というウッドの暴言を取り上げる。これは全くありえないことだとスウィフトはいう。実行するには、ウッド貨をすべて溶かして新たに中空の玉をつくらなければならないからだ。

そして、結びでスウィフトはアイルランド国民が「ジュピターから遠く隔っているのと同じように雷からも遠去かって」粗革製のドタ靴を穿き、平和に馬鈴薯を食する姿を願っている。

カータレットは着任2日後の土曜日には大法官のミドルトン<sup>(50)</sup>と対策を話し合い、5日後にはアイルランドの枢密顧問官を集めて第4書簡にたい

する対応を協議した。その結果、同書簡をイングランドとアイルランドの疎隔を図り、アイルランド国内での動乱を扇動する不法文書と断定し、第4書簡の執筆者の名前を明らかにした者には300ポンドの懸賞金を与えるという布告を10月27日付で公布した。キング大主教を含む枢密顧問官の数名は署名を拒否した。だが、布告はいつてみれば一種の茶番だった。書簡の執筆者がスウィフトであることはだれしも知っていたからである。ダブリンの民衆は老若男女を問わずうち揃ってサミュエル前書第14章第45節の次の文句を黙約のように口にしていた。

民サウルにいいけるにはイスラエルの中にてこの大いなる救いをなせる  
ジョナサン断じて葬むるべからず、エホバ生ある限り、ジョナサンの  
髪の一筋なりとも地に落すべからず。ジョナサン神と共に今日働きた  
れば、かくして民ジョナサンを救いて死なざらしむ。<sup>(51)</sup>

こうして、懸賞金欲しさにスウィフトの名を官憲に告げる者はだれ1人  
いなかったのである。スウィフトが難を逃れたのは第4書簡の中でウォル  
ポール内閣での枢要な閣僚職を解かれてアイルランド総督として左遷され  
てきたカータレットにスウィフトが好意的だったことも幸いしたかも知れ  
ない。スウィフトはここでカータレットはまだ37歳という若さだが学識  
を具えた活力ある一流人物だから、このような総督を迎えたからにはアイ  
ルランドは将来可能なかぎりの繁栄を期待できるといっている。

スウィフトは当時処罰を恐れるよりもむしろ激しい目まいと耳鳴りに苦  
しんでいた。テイッケル<sup>(52)</sup>宛の1724年10月24日付の短信では「また耳が  
聞こえなくなり苦しんでいます。自室の中にこもる外うつつがありません」<sup>(53)</sup>  
といい、チェトワード宛の同年10月の手紙では「私の耳の中で水  
車が7台廻っている感じです。1ヶ月は続くと思います」<sup>(54)</sup> といっ  
て歎いている。

こうしてスウィフトは難を逃れたが、月が変わって11月7日、印刷業者の  
ハーディングが逮捕された。ハーディングは大陪審<sup>(55)</sup>が無罪放免してくれ  
るものと信じドレイピアの素姓を明かさなかった。

11日、スウィフトは「大陪審への時宜をえた助言」<sup>(56)</sup>を公刊して、ドレイピアを有罪にするかウッドを拒否するかいずれか一つを熟慮の上決定するよう要請した。21日、大陪審はドレイピアを無罪とした。ホイット・シェッドは激怒し陪審員を罷免して新しい陪審員を任命した。スウィフトはホイットシェッドによる陪審員の罷免は独断で不法でありアイルランドの基本法規の侵害になるという下院の審議記録を抜書きして関係者に回附した。また21日当日、ホイットシェッドの馬車に「自由と祖国」という標語が貼ってあるのに気づいたスウィフトは、かかる標語は自由と祖国の偽証であるとし、次のような詩<sup>(57)</sup>を書いてホイットシェッドを揶揄した。

自由と祖国;

もっともらしい標語は、どこから盗んできたものか。

あなたの馬車に貼りつけてあるが、

あなたへの根強い非難になるだけだ (1—4)

この頃カータレットはアイルランドの新任の首座大主教ボウルター<sup>(58)</sup>にウッドの特許は却下すべきだという進言をし、ボウルターはこれに同意を表していた。

1725年7月、スウィフトはめまいとつんぼに悩まされながら国会再会の日が発刊する狙いで「上下両院への提言」<sup>(59)</sup>を執筆していた。ドレイピアを告発した懸賞金付きの布告書はすでに布告後6ヶ月以上を経過しているので時効になっていた。だが、3たび首に懸賞金がかかるのを嫌ったスウィフトが友人たちの助言を容れて上記「提言」の仕上げを急いでいた時、ウッドの特許が破棄されたというイングランドの控訴院からの通達がカータレットの許に届いた。8月19日のことだった。同控訴院は国会開会当日、ウッド特許の破棄を公表するようカータレットに命じた。これには今回の廃棄はアイルランド国民の願望と請願による異例の措置だという付言まで加わっていた。スウィフトは直ちに「提言」の上梓を控えた。もはやドレイピアを登場させる必要はなくなったからである。1725年8月31日ジョン・ウォーロール師へ宛た短信でスウィフトは「ハーディングの妻は

満足でしょう」<sup>(60)</sup> といっているが、彼女の夫である印刷業者ジョン・ハーディングはスウィフトに救出されることなく同年4月獄中で死んでいた。ハーディングはドレイピア事件の殉教者だが、スウィフトのように愛国者として讃えられることもなかった。

### 注

- (1) *A Proposal for the Universal Use of Irish Manufactures.*
- (2) Arachne.
- (3) Pallas. Athens の守護神である女神 Athene の別称。
- (4) William Nicolson (1655—1727).
- (5) Derry. 北アイルランド北西部の州。
- (6) Irvin Ehrenpreis, *Swift* Vol III, p. 117.
- (7) the South Sea Bubble.

スペイン継承戦争の軍事費その他で公債を出し過ぎたため利子の支払いに苦慮していた英国政府は、これを整理するのが目的で1711年南海会社を設立した。「南海」とはスペイン領南アメリカの東西海岸をさす。南海会社は公債1,000万ポンドを現金または株式で買い上げ、公債の年6分の利子と8,000ポンドの営業費で事業を営んだ。1713年スペイン戦争が終結しユトレヒト条約によって英国がスペインから同国の植民地と奴隷貿易の特権を取得すると南海会社がただちにこの特権を譲り受けた。1719年南海会社は事業を拡張して英国政府の発行する全公債を引き受け、ヨーロッパ以外の外国貿易をすべて独占しようと図った。

英国政府の支援の下で南海会社の株はうなぎ上りに上昇し1720年1月には100ポンドの株が129ポンドになり、5ヶ月後の6月には1050ポンドに急騰した。

南海会社に人気が集まると、保険、海運、鉱山等あらゆる分野にわたってこれを模倣する会社が続々と現われ、その数は200を超えた。ところが、大部分は投機を目的とした泡沫会社だったので、6月を頂点に南海会社の事業不振が発覚して、その人気は下降気味になると、泡沫会社は次々と潰れ、南海会社の株も9月には400ポンド、11月には135ポンド、12月には125ポンドというふうに暴落した。

再建を託されたウォルポールは1720年末南海会社の資本金を3,780万ポンドと査定して株主に若干の配当を行った上、南海会社には本来の事業である奴隷貿易や捕鯨等に専念させて再建に成功した。宰相になる前のこの大事件の処理でウォルポールは一躍その名を知られるようになった。

- (8) Ulster. アイルランド北東部。現在は北アイルランドとアイルランド共和国の

3州 (Cavan, Donegal, Monaghan) から成り立っている。

- (9) Herbert Davis, *The Prose Writings of Jonathan Swift*, Vol. IX, p. 21.
- (10) Alan Brodrick, Viscount Midleton (c. 1656—1728).  
アイルランド下院議長。アイルランド枢密院のメンバーでもあった。
- (11) Willam Whitshed (c. 1656—1727). アイルランドの King's Bench (王座裁判所—高等法院の一部門) の首席裁判官で、後アイルランドの大法官にまでなった。
- (12) Charles Fitzroy, 2nd Duke of Grafton (1683—1757).
- (13) Harold Williams, ed., *The Correspondence of Jonathan Swift*, Vol. II, p. 361.
- (14) Robert Molesworth, Lord Molesworth of Philipstown (1656—1725). アイルランド枢密院のメンバーであった。
- (15) Sir Thomas Hanmer, 4th Baronet (1677—1746).
- (16) Charles Butler, 1st Earl of Arran (1671—1758).
- (17) *Letter to a Young Gentleman, Lately Enter'd into Holy Orders* (1720).
- (18) Lucius Cary, second Viscount Falkland (1610—1643). 清教徒革命のさい Newbury で戦死。当代の学芸のパトロンであった。18世紀の歴史家 Clarendon はその著作 *History of the Great Rebellion* の第7巻でフォークランドを取り上げ、学識者で会話が巧みで人間味豊かな人物であったと讃えている。
- (19) Harold Williams, ed., *The Correspondence of Jonathan Swift*, Vol. II, p. 372.
- (20) John Locke (1632—1704).
- (21) Thomas Hobbes (1588—1679). ホッブスによると人間の自然状態は万人の万人にたいする戦いである。この戦いはすべての人間がみずからの自由を保持しながら他人を支配せんとする慾求から生ずる。  
この自然状態から脱出するために蟻や蜂のような自然な協定ではなく人工的な契約によって権力を賦与された組織体をつくる。ホッブスの場合、ここでいう契約とは後代のロックやルソーのように市民と支配者との契約ではなく、過半数の市民によってつくられた支配権を具えた組織体—国家 (commonwealth) —に服するために市民相互間で結ばれる契約をいう。  
そして、国家の形態としてはホッブスは専制君主制をよしとた。ホッブスは英国での内乱は国王と貴族と平民の間に権力が分割されていたのが原因であると信じていた。  
これにたいしてロックは無政府状態と専制政治を避けるために権力の分立と勢力均衡を説いた。
- (22) the Wood affair.
- (23) rap. 18世紀のアイルランドで流通した半ペニーの私鑄通貨。
- (24) Irvin Ehrenpreis, *Swift*, Vol III, p. 189.

- ②5 Charles Spencer, 3rd Earl of Sunderland (c. 1674—1722).
- ②6 Herbert Davis, *The Prose Writings of Jonathan Swift*, Vol. V, p. 258.
- ②7 The Evening Post.
- ②8 The Flying Post. ホイッグの有力な機関紙であった。
- ②9 M. B. Drapier.
- ③0 *Letter I.*  
*To The Tradesmen, Shop-Keepers, Farmers, And Common-People In General Of Ireland.*
- ③1 John Harding (1678—1713).
- ③2 Cork.
- ③3 Waterford. コークと共にアイルランド共和国南部の州都で海港。
- ③4 John Carteret (1690—1763).
- ③5 *Letter II.*  
*To Mr. Harding The Printer.*
- ③6 Troy Weight. 金銀, 宝石などを測るのに用いる衡量。12 ounces を 1 pound とする。
- ③7 *Letter III.*  
*To The Nobility And Gentry Of The Kingdom of Ireland.*
- ③8 Herbert Davis, ed., *The Prose Writings of Jonathan Swift*, Vol. X, p. 31.
- ③9 Goliath [gə'láíəθ].
- ④0 shekel. 古代ヘブライの重量。単位約 14 g。
- ④1 *A Serious Poem upon Willian Wood* Harold Williams, ed., *Swift's Poems*, Vol. I, pp. 333—338.
- ④2 Kilmainham. ダブリン郊外。ここに死刑場があった。
- ④3 *An Account of Wood's Execution* (1742).
- ④4 Herbert Davis, ed., *The Prose Writings of Jonathan Swift*, Vol. X, pp. 145—147. いくつか例を挙げると次のようなものがある。
- |                 |                                  |
|-----------------|----------------------------------|
| Cook.           | I'll baste him.                  |
| Groom.          | I'll curry his Hide.             |
| Rabbit-Catcher. | I'll ferret him.                 |
| Scavenger.      | Throw him in the Kennel.         |
| Dyer.           | I'll beat him black and blue.    |
| Anabaptist.     | We'll dip the Rogue in the Pond. |
| Nurse.          | I'll swaddle him.                |
| Shoemaker.      | Set him in the Stocks.           |
| Banker.         | I'll kick him to Half-Crowns.    |

(料理人 焼き汁をかけてやる。

馬丁 ヤツの皮に馬櫛をかけてやる。

兎捕り. 犬小屋に放りこんでやる。

染物屋. 殴りつけて青黒い痣をつくってやる。

アナバプティスト (再浸礼派)

ヤツを池に浸けてやる。

看護婦 <sup>むつき</sup> 襦袢でくるんで動かないようにしてやるわ。

靴屋 木杵にはめこんでやる。

銀行員 蹴っとばして半クラウンの硬貨にしてやる。)

(45) The Dublin Intelligence.

(46) Arlington Street. ロンドンの高級住宅地。

(47) *Ltter IV.*

*A Letter To The Whole People Of Ireland.*

(48) Esau [i:sə].

Isaac と Rebecca の長子。一椀の粥と引き換えに弟の Jacob に相続権を売った。(旧約・創世紀)

(49) Herbert Davis, ed., *The Prose Writings of Jonathan Swift*, Vol. X, p. 53.

(50) Alan Brodrick, Viscount Midleton (1660—1728).

(51) 小型旧約聖書 (日本聖書協会) p. 409.

(52) Thomas Tickell (1686—1740). 詩人で政治家。カータレットの秘書を勤めた。

(53) Harold Williams, ed., *The Correspondence of Jonathan Swift*, Vol. III, p. 37.

(54) *Ibid.*, p. 36.

(55) the Grand Jury. 陪審員は 12 人から 23 人。起訴状を審査して証拠十分と認め、12 人以上の賛成があれば起訴を決定する。英国では 1933 年に廃止された。

(56) *Seasonable Advice to the Grand Jury.*

(57) *Whitshed's Motto on his Coach.* Harold Williams, ed., *The Poems of Jonathan Swift*, Vol. I, pp. 347—349.

(58) Hugh Boulter (1672—1742).

(59) *An Humble Address to both Houses of Parliament.*

(60) Harold Williams, ed., *The Correspondence of Jonathan Swift*, Vol. III, p. 93.

#### 主要参考文献

Herbert Davis, ed., *The Prose Writings of Jonathan Swift* (Oxford, 1969).

Temple Scott, ed., *The Prose Works of Jonathan Swift, D. D.* (London, 1908).

Sir Walter Scott, ed., *The Works of Jonathan Swift, D. D.* (Edinburgh, 1824).

Irvin Ehrenpreis, *Swift* (Methuen, 1983).

Henry Craik, *The Life of Jonathan Swift* (Burt Franklin, 1969).

Harold Williams, ed., *The Correspondence of Jonathan Swift* (Oxford, 1972).

Harold Williams, ed., *The Poems of Jonathan Swift* (Oxford, 1966).